Kobe Kaisei College

リズム表現活動におけるピアノ演奏法習得の試み

「初等音楽」実践過程の記録

南　夏世

１．はじめに

『幼稚園教育要領』において６領域で示されていた保育内容は、平成元年に５領域に改訂され、新たに領域「表現」が新設された。改訂で示された「表現」では、将来に向けて確立していく文化的側面の基礎となる心情・意欲・態度を幼児期に育てることを目標として示している。言い換えれば､子どもが表現することを楽しみ、教材と向き合い、感じ、考え、自分が思う形に表そうとするひた向きな姿勢を重んじるのである。こうして、保育者の役割は、楽器の奏法や演奏技術習得のための指導ではなく、子どもたちの活動を見守り、支え、援助をすることとなった。

「表現」とは、自らの思い、考えを態度や形に表すことであり、幼児の自己表現としては、言語表現・音楽表現・造形表現・身体表現などが考えられる。改訂から 20 余年が経ち、園での領域「表現」の活動内容は、音楽とダンス、音楽と絵画・製作など絡み合った総合的な表現活動へと広がりをみせている。活動内容が多様化すれば、音楽の指導においても、より柔軟性のある幅の広い能力やピアノ演奏技術が求められることとなる。

領域「表現」に含まれる音楽的内容の主な活動には、

①音・音楽を聴く活動
　耳を澄ませて周りの音を聞くサウンドウォッチング、あるいは音楽の鑑賞など。

②楽器を使う活動
　曲に合わせてリズム楽器（ボディパーカッションを含む）の演奏、または音楽会・発表会に向けての合奏。

③歌う活動
　子どもの歌や童謡などの歌を教わり、歌う。

④体を動かす活動
　音楽に合わせて体を動かしたり、イメージを広げて体で表現する。

⑤つくる活動
　簡単なわらべ歌調の歌を作ったり、手作りの楽器などで楽しむ。

などの内容が挙げられる。

この中から本稿は④の音楽に合わせ体を動かす運動、つまり身体表現と結びついたリズム表現活動におけるピアノ演奏[1)]法習得について探求していく。

「表現活動を支え、展開させていく道具」として、ピアノ以外のリズム楽器やギター、あるいは歌やボイスパーカッションなども考えられる。保育者を目指す学生の中には、叩けば音が出る膜鳴楽器（太鼓など）や振ればよい体鳴楽器（鈴など）を好み、楽譜通りに弾けないという苦手意識からピアノを敬遠する者も多い。しかし、ピアノは旋律楽器としてだけでなく、打楽器としての役割も併せ持っており、重ねて音域も広く、多彩な音色と様々な奏法での表現が可能である。また、声や打楽器類では、その楽器に精通し、高度な技術を習得していなければ豊かで幅のある音を奏でられないが、ピアノであれば楽器の特性を生かし、技術的に未熟であっても様々な表現が可能なのである。そういう意味で、やはりピアノが一番身近で表現活動を支える楽器に適していると筆者は考えている。

---

1) 一般的にこの活動は「ピアノ伴奏」といわれるが、ピアノが果たす役割の重要性を考慮し、本稿では「ピアノ演奏」を用いた。

NII-Electronic Library Service

Kobe Kaisei College

リズム表現活動時における保育者のピアノ演奏は、指導者は「ピアノが間違えずに弾ける」というだけでは活動を支えられない。ピアノを自分のペースで淡々と演奏するのではなく、子どもたちの活動を主体にし、それを支えられる表情豊かな演奏が求められえる。子どもたちが音楽に反応する、つまり音を心で感じて体で表現するためには、ピアノ演奏自体により深く大きな表現力を持たせなければならない。保育者の表現が、ピアノという媒体を通して子どもたちに伝わるのである。保育者がピアノの音の中に自身の思いを反映させるためには、極めて長い修練期間が必要である。

この課題を、ピアノを学習し始めて間もない学生が習得するのは、至難の業である。入学前からピアノを学習してきた学生にとっても、何回かの授業で習得できる課題ではない。筆者は神戸海星女子学院大学（以下本学）を対象に、「初等音楽Ⅰ～Ⅳ」にわたる４科目の期間をかけてリズム表現時におけるピアノ演奏習得のための学習に取り組み、その成果を得ることができた。平成２０年度入学の本学学生を対象とするその過程をまとめ、考察する。尚、リズム表現活動ピアノ演奏法習得のための準備期間となる「初等音楽Ⅰ～Ⅲ」は第２章に、実施授業である「初等音楽Ⅳ」を第３章に記述し、課題ごとの指導ポイントを枠中にまとめる。

２．リズム表現学習準備過程の授業

１）カリキュラムの概要

本学では、「初等音楽Ⅰ・Ⅱ」が、幼稚園教諭および保育士の資格必修授業である。「初等音楽Ⅲ・Ⅳ」は選択必修であるが、保育の仕事に携わる志のある学生は、ほぼ全員が履修している。

１年次生春学期開講の「初等音楽Ⅰ」および秋学期開講の「初等音楽Ⅱ」は、音楽の基礎を学習しながら個人の音楽技能を高めることをねらいとする。３年次生春学期開講の「初等音楽Ⅲ」および秋学期開講「初等音楽Ⅳ」は、保育者として子どもたちの表現活動が援助できるように、活動内容の研究および実践を目標としている。

２）「初等音楽Ⅰ・Ⅱ」における準備

「初等音楽Ⅰ・Ⅱ」は、入学前のピアノ学習年数と到達度を確認するクラス分けテストを入学時に実施し、A ピアノ初心者クラス、B 簡単なピアノ曲が弾けるクラス、C ソナチネ以上で、ある程度の初見能力と読譜力があるクラス、に分け１０人程度で編成する。クラスにより用いる楽曲は異なるが、「楽譜の基礎知識を学びながら読譜力をつけ、ピアノ技術を向上させる」という目的は同じである。

授業は、半期全15回１コマ９０分を前半と後半に分けて構成し、前半では、音楽の基礎学習をクラス全体で行い、後半は、個人のピアノ技術の向上をめざし、それぞれの課題で個人ピアノレッスンを行う。

【「初等音楽Ⅰ」前半クラス授業】

コードの学習に重点を置き、楽典や子どもの歌の弾き歌いも、コード習得に関連付けた内容で行う。

コードの仕組みや構成を丁寧に指導し、メジャー・マイナー・オーギュメント・ディミニッシュの４種類のコードと属七のコードを、コードは音符に、音符はコードに表すことができるように繰り返し練習問題を行う。

指導ポイント①

４種類のコードを理論で学習すると同時に、響きの違いを耳で感じ取れるようにする。音が１音変わるだけで、和音の響きが全く異なってしまうことを理解し、コードに興味を持たせる。音は判別できなくてもよい。和音の響きを感じ取る。

コードを理論で理解できれば、ハ長調の主要３和音（C　F　G）と属７（G7）は、瞬時にピアノで抑えられるように繰り返し練習する。３コードがしっかりと抑えられるようになれば、ハ長調の子どもの歌をコード奏で弾き歌いする。

NII-Electronic Library Service

初めは、コードが記入されている旋律の一段譜を用い、コード奏に慣れればいろいろな形の伴奏形に挑戦してみる（［楽譜１］参照）。次に、歌の旋律がピアノの右手となる二段譜・歌の旋律とピアノの楽譜で書かれた三段譜に進めていくが、必ず楽譜をそのまま弾くのではなく、コードを自分で伴奏の形にして弾き歌いを行う。

【「初等音楽Ⅱ」前半クラス授業】

音階と調性の学習をする。Ⅰで学習したハ長調の他に、ト長調・ニ長調・ヘ長調・変ロ長調の音階とカデンツを楽譜なしで弾けるようにする。子ども歌で使用頻度の高い下記のコードについてはテストを行い、ランダムに選択したコードを瞬時に抑えられるように練習する。

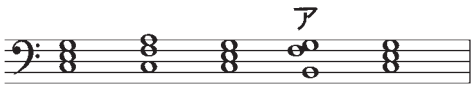
メジャーコード：C　D　F　G　Bb　Eb

マイナーコード：Cm　Dm　Em　Fm　Gm　Am

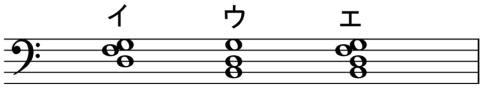
属七：C7　D7　F7　G7　A7

指導ポイント②

カデンツの定型を重んじる。



アも右手の旋律によって、イまたはウを使用するよう説明する



しかし、G7 としての働きが重要なのであるから、音の選択が心的負担にならないよう配慮する。エまたは自分の弾きやすい形（アが多い）を選択させる。

【「初等音楽Ⅰ・Ⅱ」後半個人レッスン】

個人のピアノの進度に合わせて課題を決め、各々の技能を高めていく。A B クラスの学生は、読譜力をつけ、明瞭な音で演奏できるようにする。そして C クラスは、楽譜に書かれた音および記号、曲想に関する楽語を読み取り、表情豊かに、楽譜に忠実に演奏することを目標に教則本を進めていく。その際、弾き直しをせずに弾きこなすことができるように、励みを与えることが大切である。

指導ポイント③

ピアノに対する嫌悪感、劣等感を決してもたないよう指導する。

自分の技量に応じて曲想などの表現をつける。同じ記号でも奏法により音が相違することに気付かせる。

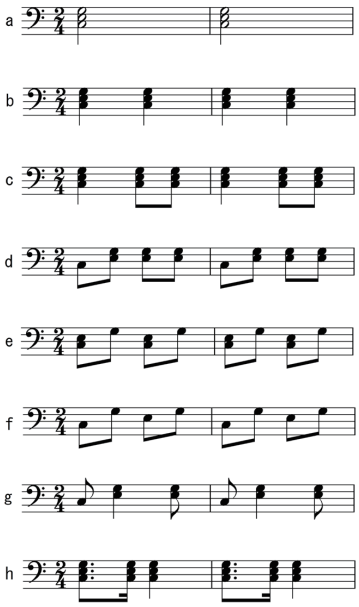
３）「初等音楽Ⅲ」における準備

表現活動を援助できる保育者を育成するために、次の５項目を学習および演習する。

【コード奏による弾き歌い】

全 15 回の初めの３回の授業で、園生活でよく歌われている生活の歌を、右手はメロディー、左手はコード奏というパターンで演習する。その際、左手のコードは［楽譜１］の伴奏形を順番に試演し、伴奏の基本的なパターンを理解する。

［楽譜１］



指導ポイント④

伴奏のリズム形によって曲の感じが変わることを感じる。

NII-Electronic Library Service

Kobe Kaisei College

【ピアノ演習】

教材は「動きのためのリズム曲集」（甲南女子大学と共同オリジナル教則本）を使用する。この本は、右手がメロディー、左手は動きに適した典型的なリズム伴奏の比較的平易なピアノ曲が、「歩く」「走る」「とぶ」「ゆれる」の４項目に分けて収載されている。学生は、各項目から曲を選択し、その曲がどのようなリズムで構成されているかを感じ取りながら練習する。曲のテンポ、タッチ、曲想に注意をし、項目の「動き」に適切した演奏ができるように練習する。そして、曲が仕上がると受講生全員の前で演奏し、他の学生は、歩いたり、走ったり、体を揺らしたり、ピアノ演奏に合わせて動作をする。演奏と動作に一致が見られたら、音楽の速さや強弱、音域など少し変化を与え、それに聞き手が反応し、動作を変える。

指導ポイント⑤
「歩く」「走る」「跳ぶ」「ゆれる」の曲のリズム伴奏形を確認する。動作と音楽の関連性を感じ、他者に思いを伝えられる演奏を心がける。

【器楽合奏用の編曲】

子どもたちの園での音楽会を想定し、鍵盤楽器と打楽器のための編曲作品を一人１曲書く。春学期の授業の柱となる項目で、自分が選択した旋律楽器３段と打楽器６段の楽譜を完成させる。学生にとっては労力がいる学習だが、譜面を書く事で、コードやリズムが再確認でき、基礎的な音楽力はかなり伸びると考える。

指導ポイント⑥
自分がイメージしたリズムを音符に表す技術を身につけることで、リズム形を確認する。またリズムに対する意識を深める。

[その他・歌唱指導演習]

リズム表現学習と直接的な関連性は薄いが、教育実習を想定し、歌唱指導または子どもの曲を使った表現活動の模擬指導を行う。学生は領域「表現」の意義、子どもたちにとっての表現活動の意味、保育者としての役割などについて考え、表現領域の重要性と可能性を理解する。

３．リズム表現学習実践の授業

１）リズム表現活動について

前章ではリズム表現活動におけるピアノ演奏習得のための準備となる指導ポイントを、「初等音楽Ⅰ」から順にまとめた。本章で「初等音楽Ⅳ」での実践を記述する前に、リズム表現活動におけるピアノ演奏の役割ついて、確認しておく。

幼児期には、感情がそのまま動作として表現される。子どもはうれしい時は跳んだり走り回ったり、不快な時には座り込んで泣き叫ぶなど、喜怒哀楽を自分の意志で表現するのではなく、自然に体全体で表現するのである。子どもにとって日常動作の延長である身体表現活動は、ごく自然の無理のない活動で心から楽しめると考えられる。

身体表現活動としては、CD などの曲に合わせて振り付けや創作ダンスを行う活動が代表的であるが、本稿は保育者のピアノの演奏を伴うリズム表現活動に限定して言及していく。この活動は大きく２種類に分かれると考えられる。規則的なリズムに基く活動と、自由な発想や情緒に重点を置く活動である。前者は、「歩く」「走る」「跳ぶ」「回る」など、音楽のリズムに合わせて反復する動作を行う「リズム遊び」、後者は、動物の動きを真似たり、風物などに変身するなど、イメージを伴いながら自由な発想で行う「表現遊び」である。

どちらの活動も音楽の役割は重要である。子どもは、音楽に合わせて表現活動を展開させていく。表情のない音楽では、幼児は十分な表現活動はできない。保育者は動きのイメージをし

NII-Electronic Library Service

っかりと確立させ、演奏に反映させる技術が必要なのである。子どもたちが、保育者のイメージとは異なるイメージを抱いた場合でも、保育者は子どもの主体性を重んじながら、できるだけ演奏者のイメージが共有できるように演奏で導く必要がある。保育者は表情豊かに大きな表現力でピアノを弾くという行為に加え、幼児の動きを注意深く見守り、即興的要素も加えられた柔軟なピアノ演奏で援助・補助ができるようにしなければならない。このように、リズム表現活動のピアノ演奏は、非常に高度な技術と豊かな表現力が要求されるのである。この学習を、「初等音楽Ⅳ」で実践する。

２）「初等音楽Ⅳ」における実践

全15回の最初の授業２回で、ピアノ演奏のための学習と基礎演習を行い、３回目の授業で実践発表を行う。

まず、前述した指導ポイント⑤「歩く」「走る」「跳ぶ」「ゆれる」の曲の、伴奏のリズム形を確認することから始める。

伴奏形として弾き慣れている［楽譜１］のリズムで「歩く」にふさわしいリズムを選択する。歩く基本拍子を4/4で考えると、a＋b　a＋c　b＋c　b＋h ・・・・・といくつものリズムパターンを作ることができる。さらにこの１つの伴奏形でも、①速さ　②音の高さ　③音の強さ　④奏法　⑤その他の５項目を変えることによって、音楽の表情が変化することを学ぶ。具体的に『みつばちマーチ』を用いて、①～⑤の項目について変化をつけながら演習を行う。

①速さを変える。
- 遅く(Largo, Adagio, Andante)、
- 中くらいの速さ(Moderato)、
- 速く(Allegretto,　Allegro, Presto)
- だんだん速く(acclerando)、
- だんだん遅く(ritardando,　rallentando)

②強弱を変える。
- 弱く～強く（pp,　p,　mp,　mf,　f,　ff）
- だんだん強く(crescendo)
- だんだん弱く(decrescendo, diminuendo)

③音の高さを変える。
- 左右とも高く
- 左右とも低く
- 左右の手を離して(右は高く、左は低く)
- 左手でメロディーを、右手で和音を

④奏法により表情を変える。
- 音をはねて（staccato）
- 音の長さを十分に保って（tenuto）
- アクセントをつけて
- アーティキレーションを変えて

⑤その他
- 移旋をする。
- 装飾音符をつける。
- 拍子を変える。
- 音をオクターブで重ねていく。
- フレーズごとに休符を挟む
- 突然音楽を止める

それぞれ１項目を取り上げても、異なる表情での演奏が可能である。たとえば、Allegroにもいろいろな速さがあるし、fでもいろいろな強さがある。特に④において、アクセントの位置を変えたり、アーティキレーションで音のつながりを変化させたりすると、全く別の曲かのように変化する。

指導ポイント⑦

１つの曲のヴァリエーションを学ぶと同時に、それをピアノで表現できるようにする。人前で表現力豊かに演奏するには、技能の習得に合わせて心的解放が重要である。

次に、劇中音楽や心的表現に効果的なピアノの特殊奏法を学習する。

①不協和音　②クラスター　③アルペッジオ
④グリッサンド　⑤全音音階　⑥半音階
⑦増三和音

これらの奏法の学習を、学生は「遊び」と認識するので、のびのびと思い切り遊ばせる。ピアノの持つ楽しさと限りない可能性を感じさせる。

NII-Electronic Library Service

併せて、これらの奏法を用いて「なりきり演奏」も行う。高音から低音までできるだけたくさんの鍵盤を用いて、あたかもジャズピアニストになったつもりで演奏してみる。

指導ポイント⑧
ピアノの音楽は、形式が整った楽曲ばかりではなく、自由で柔軟であることを認識する。

総括として、『歌おう　弾こう　子どもとともに』に、オペレッタとして掲載している《メリーさんのひつじ》を実演する。

指導ポイント⑨
物語に音楽を挿入することによって、物語が立体的に広がるのを感じる。

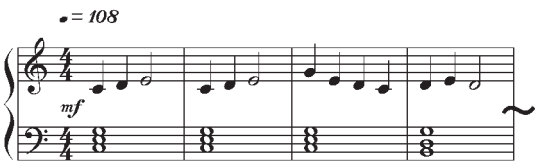
3）学生の作品

編曲の方法、効果的奏法、《メリーさんのひつじ》の解説と実演した後、課題を与える。自分が演奏しやすい比較的単純な曲を１曲選び、「歩く」「走る」「ゆれる」などのリズムが活用できる物語を作って、それにふさわしい曲に変奏する。その際、効果的奏法を１回以上加える。単純な曲と限定するのは、変化させやすいということと、安易に弾けるので表情をつけることに集中できるという理由である。

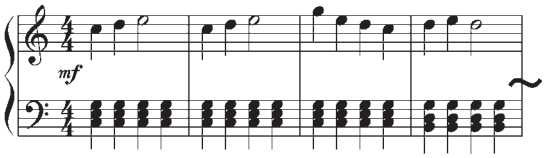
受講生１５名それぞれに創意工夫をし、発表した。変奏に使用した楽曲は《ぶんぶんぶん》《どんぐりころころ》《森のくまさん》などである。その中で、特にまとまりのある物語を作り、物語に適した変奏を作ることができた２名の学生の作品を取り上げる。

例１《ちゅうりっぷ》

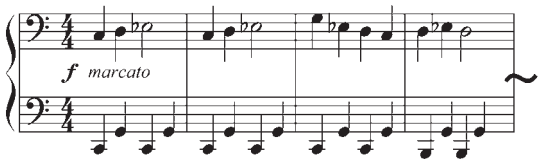
（１）とある幼稚園の花壇には、チューリップがたくさん植えられていました。



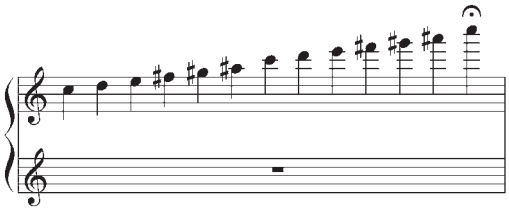
（２）色とりどりのチューリップはきれいに咲き、みんな大喜びしました。



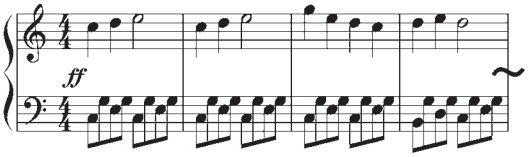
（３）しかし次の日、大雨でチューリップは倒れてしまいました。



（４）みんなはとても悲しかったけれど、一生懸命お世話をしました。すると・・・・



（５）チューリップは元気を取り戻し、再びきれいに花を咲かせました。



（１）チューリップのテーマの提示に続き、チューリップが咲いたとき（２）右手の音域が高くなり、左手の伴奏が４分音符の刻みになり、華やかな感じになった。（３）では、チューリップが倒れた悲しみを、短調に移旋することによって表現した。（４）「すると・・・」という時間的空間は全音音階を用いて表現できた。（５）では左手が８分音符分散和音になり、さ

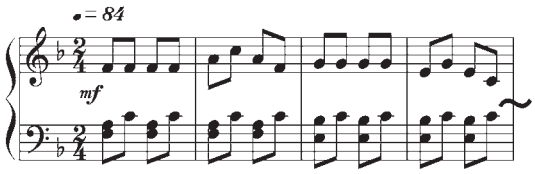
NII-Electronic Library Service

Kobe Kaisei College

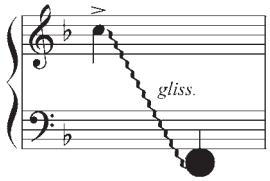
らにチューリップが咲き乱れ、子どもたちが喜ぶ姿が表れている。

例２《１０人のインディアン》

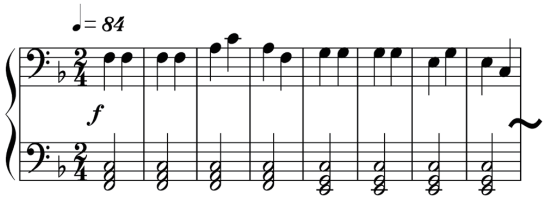
（１）１０人のインディアンが歩いている。



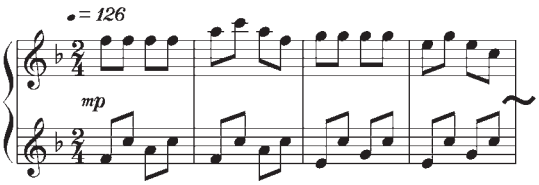
（２）熊にぶつかった。



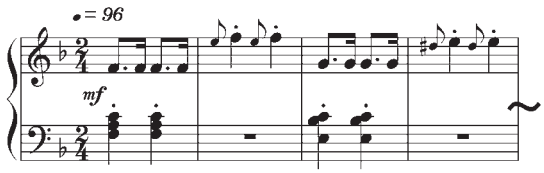
（３）追いかけてくる。



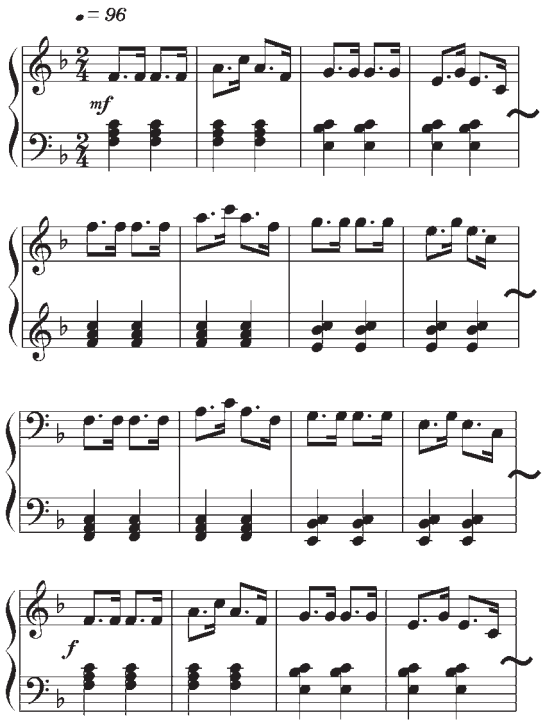
（４）あわてて逃げる。



（５）ことりと遊ぶ。



（６）楽しくなって、スキップしながら踊る。



《１０人のインディアン》では、（１）インディアンのテーマの提示に続き、（２）熊にぶつかった驚きと衝撃をグリッサンドとクラスターで表現した。（３）では追いかける熊を表現するために音域を下げ、旋律も４分音符に値をのばし、のっそのっそと走る様子を表現した。それに対しインディアンが逃げる音楽（４）は右手の音域を高く、旋律を８分音符にすることで、スピードを出して逃げる様を伝えることができた。（５）では、新たに出現する小鳥を装飾音符で表し、旋律にうまく挿入させている。（６）ではインディアン・熊・小鳥を、異なる３つの高さに変奏し、スキップのリズムを使うことで、さらに楽しい雰囲気が表現されている。

両作品共に、左手の伴奏に工夫がみられ、強弱、速さ、音域の面で変化に富んでいる。また効果的奏法も取り入れ、物語に応じた作品に完成することができた。これまでの筆者の授業では、１つの曲を単に自分が変化させやすい３つ

NII-Electronic Library Service

Kobe Kaisei College

のパターンを考え、発表するにとどまっていた。それでも、伴奏形、音域、速さ、移旋するなどの工夫は見られたが、今回自分で作った物語に音楽を乗せることで、一層の変化と言葉との関連による工夫を感じることができた。

「初等音楽」受講生が、曲の変奏法をしっかり習得することができたことがうかがえる。これらは「初等音楽Ⅳ」での説明と実践の３時間の結果ではなく、「初等音楽Ⅰ～Ⅲ」の指導ポイント①～⑨の準備があったからこその成果だと考えられる。

４．まとめ

特筆すべき事項は、例１、例２で取り上げた学生は、共に大学入学前にピアノを習った経験のない全くの初心者であったということである。「初等音楽」の履修によって楽譜通りにピアノが弾けるようになっただけでなく、コードを覚え、自分の思いで音楽を表現（変奏）し、演奏できるようになった。すなわち、音を「自分の言葉で語れる」ということである。もちろん、学生本人の努力と練習の成果だが、後輩たちの大きな模範になることに違いない。

自分が作った変奏の曲は、そのままでは現場で活用できない。そして、本稿で取り上げた既成の曲を変奏させる学習は、リズム表現活動の一部分である。また、例に挙げた学生のピアノ演奏は、初心者特有の多少委縮した演奏であることも事実である。しかし、この変奏の実践は、リズム表現活動の源流であると考える。音楽の基礎が確立していなければ成り立つ学習ではない。確固たる基礎の上にこの学習を実践することで、柔軟性のある豊かな表現演奏へと繋がり、さらに演奏技術を伸ばしていくことができると考えている。後は経験の積み重ねで、学生自身で総合的音楽力を高めていけると確信している。

今後さらに、この活動をより身近なものとして積極的な学習意欲を持たせるために、実際の現場での「表現遊び」「リズム遊び」の様子を学生に見学させたり、録画したものをビデオで見せたりする必要があると考えている。

また、リズム表現のピアノ曲を弾きこなすために、スキップのリズムや音の跳躍、効果的奏法などを取り入れた短い練習曲を筆者が 10 曲作った。表現力豊かな演奏ができるようになるために、次年度からはこの練習曲の活用を考えている。

幼児期は、表現の基礎作りとなる貴重な時期である。保育士養成学校である本学においても、さらなる研究を重ね、子どもたちの表現活動を生き生きとした音楽で支え、援助できる保育者を育てていきたい。

参考文献

・文部科学省(2008)『幼稚園教育要領解説』
・大畑祥子(1999)『保育内容　音楽表現』建帛社
・古市久子(1998)『身体表現』北大路書房
・三森桂子(2010)『音楽表現』一藝社
・古市久子・玉井明(1995)「身体表現とその伴奏音楽についての新しいアプローチ」大阪教育大学幼児教育学研究 15 巻
・今川恭子・宇佐美明子・志尾一成(2005)『子どもの表現を見る、育てる』文化書房博文社
・坂井康子監修(2006)『歌おう　弾こう　子どもともに』

NII-Electronic Library Service